

プロジェクト名	日本近代文学の国際的受容状況に関する翻訳テキストを通じた調査研究		
プロジェクト期間	平成 23 年度		
申請代表者 (所属講座等)	久保田裕子 (国語教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	
<p>① 研究の目的</p> <p>1, <u>平成 22 年度学長裁量経費「福岡教育大学プロジェクト推進経費」(研究推進支援プロジェクト) 研究課題「日本文学に描かれた東南アジアのイメージ表象に関する分析研究」の継承的発展。</u> 本研究においては、前年度の学長裁量経費による研究成果の隣接的テーマを設定し、発展させることを目指した。自分自身の総体的研究テーマをいくつかの領域に切り分け、複数年度においてそれぞれの研究を段階的に遂行し、一定の研究成果の見通しがある状態で、新たな科学研究費補助金の申請へとつなげることを目的とする。</p> <p>2, <u>本プロジェクトの遂行による科学研究費補助金の申請。</u> 本プロジェクトの研究成果を平成 22 年度の研究成果と接合させ、科学研究費補助金の申請に際して、より包括的かつ総合的な研究テーマへと発展させる基盤を構築する。科学研究費補助金の申請に際し、既に一定の成果を挙げた内容を含んでいること、なおかつ複数の視点からの報告が含まれていることが要求される。従って共同研究においては、文学研究のような個人研究の領域において申請を行うことは非常な困難を伴う。本プロジェクトでは、段階的に複数の隣接的テーマを年度ごとに遂行するという研究体制の構築により、個人研究が中心となる領域（文学・文化研究）の科研申請の困難を克服する一つの試みを行った。</p> <p>3, <u>資料の公開による研究成果の汎用性の向上。</u> 科学研究費補助金を獲得できた段階で、戦略的に次の申請へと向けた体制構築を念頭に置く必要がある。本プロジェクトでは、国際的に受容されている三島由紀夫などの日本近代文学の作家の海外における翻訳テキストを収集・分析した。資料収集・整理とその公開は汎用性・有効性を持つ上、日本文学以外の研究領域においても研究成果を共有することが可能になる。</p> <p>② 研究の内容</p> <p>1, 三島由紀夫を中心とする日本近代文学の受容状況に関する調査。テキストが海外においてどのように受容されたかを知るために、三島の各国・各言語における翻訳テキストを調査・収集する。</p> <p>2, アジア地域における日本近代文学の翻訳を通じた受容状況の調査分析。翻訳テキストがどのように流布したかという経緯をたどり、地域によって異なる日本文学の受容状況について考察する。</p> <p>3, 1 で収集した資料に 2 の分析結果を加えた成果報告を行った。国際交流基金の visiting professor program により、タイ国立チュラーロンコーン大学において客員教授として集中講義を行い、その機会にチェンマイ大学・国際交流基金の共催で日本文化研究ワークショップを開催した。また社会貢献事業として、福岡市文学館において、市民講座を実施し講演を行った。1・2 において述べた獲得的資金による研究成果の一部を社会に対して公表した。</p> <p>③ 研究の方法・進め方</p> <p>1, 平成 23 年度は、日本文学の翻訳されたテキストを調査・収集して研究の基盤となる資料を作成した。さらに日本文学のテキストの背後にある歴史的・社会的コンテキストを反映した同時代言説について調査・分析し、日本近代文学における異文化表象の問題について考察した。主に国際的評価の高い三島由紀夫の翻訳テキストの分析を行うことで、海外における日本文学の受容状況について分析した。</p>			

2, 1に関連する資料の調査・収集を日本の国立国会図書館、タイ国ナショナル・ライブラリー、タイ国公文書館で行った。

3, 研究成果発表に関して、地域の文学館と共催した市民講座、国際交流基金と共催したタイ国における講演会・ワークショップ、本学における学生参加のワークショップを実施した。日タイの国際交流活動を通して、学術研究と国際交流教育、生涯学習との接合を試みた。

④ 実施体制

現在、研究が進行しつつある平成22年度～24年度交付期間の科学研究費補助金応募課題「日本文学に描かれたタイ国文化表象の分析研究」と本プロジェクト「日本近代文学の国際的受容状況に関する翻訳テキストを通じた調査研究」及び、平成22年度学長裁量経費プロジェクト「日本文学に描かれた東南アジアのイメージ表象に関する分析研究」における調査・研究には関連性・継続性がある。これらの重なりつつ展開するプロジェクトを相互に補完・連携することで、より包括的かつ総合的な研究計画が可能になる。その際に複数の獲得的資金の研究テーマの完全な重複は避けなければならない。しかし個人研究の場合、それぞれのプロジェクトのテーマ内容が近接するのは、むしろ当然と言える。異なる資金を通して行う教育・研究領域を分け、地域・時代等によって対象・方法を分断化して遂行するなど、それぞれの個別テーマに集中することが必要である。むしろ資金別に教育・研究領域を分割して研究を遂行することが、科研申請に向けた研究計画全体の構造化につながるような契機としてとらえた。学長裁量経費による本研究は、既に取得した科研の研究課題の一部を切り出し、同時進行で研究を行うことを目的とした。経費によって研究課題を切り分けることで研究の構造化を図り、なおかつ申請を通して評価・点検を受けることで、外側の目からの批評の機会を頂き、自分の研究課題を客観視する契機となった。

「研究成果報告書」(概要)で述べた通り、使用目的においては、学長裁量経費と科学研究費補助金は、基本的に分けるべきであるが、一方において、どちらかの資金を財源として行った研究およびその発表に関しては研究費区分に係わらず、できるだけ多くの機会をとらえて調査や研究を行い、その成果を発表することが、限られた財源を最大限有効に生かす方法であると考えた。また今回は、タイ国立チュラーロンコーン大学、チェンマイ大学、国際交流基金、福岡市文学館と共催の場を設けて、そこでも研究成果発表を行った。このような試みは、単に限られた予算を分担し合い、予算を有効に使用するという目的だけではなく、複数の機関が連携することで、結果としてさまざまな人材が交流し合うという貴重な機会となった。異なる機関に所属する人々と協力し合い、それぞれの資金的・人的資源を活用することで、個人研究では到底実現できなかった活動が可能になったと言える。また日本側だけではなく、タイ人、タイ在住日本人の方々の、個別の立場からの意見交換は、研究的には重層的な視点からの考察をもたらした。

⑤ 実施計画に対する研究の進捗状況(2年計画の1年目の場合)

1年計画のため該当なし。

⑥ 平成23年度実施による研究成果

1, 国際的評価の高い三島由紀夫を中心とした翻訳テキストの分析を行うことで、海外における日本文学の受容状況の分析という全体像を把握しにくい課題について、一定の方向性を見出すことが可能になった。

2, 翻訳テキストと出版についての資料的調査を行い、日本文学の国際的受容状況に関する海外の研究者との共同討議を通して、日本文学の国際的研究にも寄与することができた。

- 3, 社会貢献事業として、昨年に続き、福岡市文学館との共催で市民を対象とした講座を行うことで、獲得的資金に基づく研究成果の社会への還元を行った。地域の市民へ研究成果を還元することで生涯学習へと寄与することができ、さらに福岡市圏とアジアをつなぐ活動に参加することができた。国際的な問題と地域の問題を接合させる活動の重要性を再確認した。
- 4, 福岡教育大学において、国外・国内から2名の研究者を講師として招聘し、「日本文学を海外で教えること、学ぶこと」というワークショップを開催した。学生も参加して国際社会における教育のあり方についての共同討議を行い、研究成果と国際交流教育との接合をはかった。
- 5, 平成23年8月に国際交流基金から直接派遣され、客員教授としてチュラーロンコーン大学大学院で集中講義 (Popular Japanese fictions from the end of the Second World War) を行った。院生には日本文学の翻訳者として既に活躍している学生、日本文学・文化に関する図書の出版社の編集長もいた。集中講義は本研究とは直接関係ないものの、授業を通して翻訳を通じた日本文学を受容するという本研究のテーマについて、授業を行う中でタイにおける現況に関する情報を得ることができた。
- 6, タイ国立チェンマイ大学において行ったワークショップは、国際交流基金が日本文化を海外で知ってもらうために開催する研究セミナー活動の一環であった。タイ北部の都市チェンマイにある当大学は、日本研究センターを持ちタイ国内における日本語教育の重要拠点の一つである。国際交流基金はタイ国内において、このような日本文化関係セミナーを主催しているが、そのセミナーと共催する形でワークショップを実施し、研究成果を広くタイ国の市民と学生、及びタイ在住日本人にも伝えることができた。ワークショップは、久保田、タイ人日本文学研究者でチュラーロンコーン大学 (Chulalongkorn University) のナムティップ・メータセート (Namthip Methasate) 氏、タイ・スタディーズ専門の平松秀樹氏 (大阪大学) が行った。国際交流基金の職員の方々2名、さらに日本語通訳として、シーナカリンウィロート大学 (Srinakharinwirot University) の Pat-on Phipatanakul 氏にもバンコクから同行して頂き、合計6名の一行がバンコクからタイ北部の都市チェンマイへと飛行機で向かった。会場校となったチェンマイ大学の先生方や職員の方々には、当日の運営を全てお願いすることになった。またバンコクからチェンマイへの移動の飛行機や移動車、ホテルの手配、複数機関の間の連絡や日本語通訳のパットオン氏への依頼などの手続きに関して、国際交流基金側が担当して下さったおかげで、研究発表に集中して臨むことができた。チュラーロンコーン大学、チェンマイ大学、国際交流基金という複数機関の連携と全面的協力によって、個人では不可能な成果報告の場所づくりが可能になった。対象はタイ国の市民および日本語を学ぶ学生であったが、聴衆には在タイ日本人の方もおられた。発表は全てタイ語で行われ、久保田と平松氏の日本語による発表については、タイ語通訳をお願いした。また現代日本文学に言及する上で、重要な課題の一つである村上春樹のタイ語翻訳の問題について、会場から質問が出るなど、翻訳をめぐる議論も活発になされた。またチェンマイ大学の先生方や国際交流基金の職員の方々からも、タイにおける日本文化の受容についてお話をうかがったことも、外側から見た日本文学について知る上で貴重な体験になり、複数の機関との共催により、日本とタイの国際的な連携協力を得ることができた。またこのとき一緒にワークショップで発表したナムティップ氏、パットオン氏は、国文学研究資料館主催の国際日本文学研究集会で私が発表した折にもタイから来日して発表を聞いて下さり、「太平洋戦争前後におけるタイ表象イメージの接合と変容」という発表テーマについて、タイ側の視点から貴重なアドバイスを頂いた。

⑦ 今後の予想される成果 (学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果)

「翻訳」という研究課題に関して、⑥-6で挙げたような機会を通じて、自分自身の発表原稿を翻訳・通訳をしてもらうという得難い体験をすることができた。日本の児童文学と国語教育を研究テーマとしておられるパットオン氏が、日本語の発表内容をタイ語に翻訳する現場に立ち会うことができたが、当初自分一人で考えた計画では予期しなかった貴重な経験をすることができた。また日本語が第一言語である場合、そうではない場合を含めて、海外で日本文学を教えるという経験を持つ人々との討議を通じて、翻訳や翻訳テキストの受容という問題について再考する機会を得た。このように複数の獲得的資金は、結果として複数の研究・教育機関との関わりという経験をもたらし、さまざまな組織の横断的な連携を通して、個人研究では実現不可能な事業を遂行でき、さらに思いがけない成果であるが、別領域の人々との交流によって、自分自身の研究においても新たな視点を得た。

また福岡市文学館と連携した社会連携活動は、福岡市のアジアとの交流活動という点においても成果があった。研究者個人では、市民への広報活動や当日の会場設営を含めた運営を行うことは難しい。

その点で、市民講座の当日は福岡市文学館の全面的協力を頂き、事前の発表準備や打ち合わせを含め、文学研究にも造詣の深い専門職員の方々の手をお借りしながら市民講座を運営することができた。

研究プロジェクトの実施に際して、最大の困難の一つは、運営に伴う人手不足の問題である。本学のように規模が小さい大学において、他機関との連携をはかり、外部機関の協力を得ながら限られた予算的・人的資源を活用する方策を模索し、さまざまな立場の人々が関わる研究の場所を広げていくことが今後の課題である。

⑧ 研究の今後の展望

① 「研究の目的」に基づく②「研究の内容」については、今後も研究を継続する。その他に、本学

で実施したワークショップについて言及しておきたい。「日本文学を海外で学ぶこと、教えること」は、ナムティップ・メータセート氏、海野圭介氏（国文学研究資料館・総合研究大学院大学准教授）を講師として、福岡教育大学国語教育講座・国際共生教育講座共催で実施した。学生も参加するワークショップを実施することを通して、研究成果を教育的目的に接合させること、また本テーマに興味を持つ他大学学生や市民の方々にも成果を公表することを目的として開催した。

ナムティップ氏は国立チューラーロンコーン大学で日本近現代文を教えておられ、「日本文学に描かれたタイ表象分析」を研究テーマとされる。また日本現代文学のタイ語翻訳者としても著名であり、2000年代のタイにおける日本文学ブームを牽引したお一人であり、日本文学・文化の普及と拡大に貢献されてきた。国文学研究資料館・総合研究大学院大学准教授の海野圭介氏は、日本古典文学における歌学・和歌注釈に関する研究、古今伝授の史的研究のかたわら、アメリカ・コロンビア大学 Visiting Scholar、チューラーロンコーン大学客員教授を務めて来られた。また「外国語による日本文学研究文献のデータベース化に関する調査研究」を作成されるなどの業績もあり、日本古典文学研究の立場から、海外における日本文学研究の深化と拡大のために活動されている。

現在、日本文学を学ぶ学生、教える教師は日本語を第一言語にするとは限らず、さまざまな言語的・文化的背景を持つ人々が、日本文学や日本文化を海外で学び、教える場面も増えている。国際化がもたらしたこのような状況の中で、本学の学生も教員になってから国際化社会がもたらした状況に直面する可能性を持っている。例えば日本語を第一言語としない、異文化の背景を持つ児童・生徒が教室にいるという事態はこれから確実に増加していくと考えられる。また教員が海外研修を受ける制度もあり、そこで学び直した先生方が、日本の学校に異文化での経験を持ち

帰り、日本の学校教育にオルタナティブな視点を導入して豊かで開かれた学校づくりに寄与されている。このような現状を背景として、二人の講師の先生方は、日本以外の場所で日本文学・日本文化について「学ぶこと、教えること」の意味とその問題点を提起され、学生も大きな刺激を受けたようだった。終了後の「学生アンケート」（参考資料として添付）には、「驚いた」「新鮮だった」というような率直な言葉が並び、二人の講師の先生方が提示された問題について、学生たちが新鮮な衝撃を受けつつ、国際化に伴う問題系に向き合ったことがわかる。ワークショップ終了後に、「先生が講演で引用した論文を読みたい」と訪ねて来た学生もいた。また私のルーム生の一人は、卒業論文のテーマを「村上春樹と翻訳」に変更するなど、ワークショップに参加した経験が、学生たちを新たな考察へと導いた様子がうかがえる。教員養成課程の学生にとっての国際関係教育という課題において、留学、語学学習という面も重要ではあるが、外国語を勉強するだけではなく、「海外から見た日本文化」に関するさまざまな言説を知った上で考察を重ね、教師自身がグローバリズムの中で多様化した事態に対応するための、日本文化に関する「考え方の芯」を養う必要があると感じた。

また講師の先生方も、「彼等が先生になった後に、もう一度話をしてみたい」という感想を述べられ、学生の礼儀正しさ、ワークショップの運営に当たっての手際よさ、また議論に参加する中での質問の適確さについて、評価する言葉を頂いた。本学の学生たちにとっても、第一線の研究に基づく議論に参加するという経験は自信にもつながる。ワークショップを通じて、教員養成課程の学生を対象とした、国際化教育の中での日本語・日本文化に関する議論の場所を作ることの重要性を再確認した。

⑨ 主な学会発表及び論文等

(論文)

1, 「日本文学はタイをどのように描いてきたか」「タイ国日本研究国際シンポジウム2010論文報告書」The International Symposium on Japanese Studies in Thailand 2010, pp. 173~191, チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座編・発行

(説明) タイ国日本研究国際シンポジウム2010 (2010年10月26日、タイ国立チュラーロンコーン大学) The International Symposium on Japanese Studies in Thailand

2010, 主催: チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座, 共催: タイ国豊田自動車株式会社・国際交流基金バンコク日本文化センター)。

2, 「太平洋戦争前後におけるタイ表象イメージの変容と接合」「第35回国際日本文学研究集會會議録〈場所〉の記憶—テキストと空間」, Memories of 'places' The Relation between Text and Space, Proceedings of the 35th International Conference on Japanese Literature, pp. 87~114

(学会発表)

1, 「日本近代文学に描かれたタイ国表象—三島由紀夫『春の雪』の留学制度を中心に—」

2011年度日本タイ学会第13回研究大会, 2011年7月2日, 愛知大学豊橋校舎

2, 「太平洋戦争前後におけるタイ表象イメージの接合と変容」第35回国際日本文学研究集會・第2セッション⑤「〈場所〉の記憶—テキストと空間—」主催・人間文化研究機構国文学研究資料館

2011年11月26日, 国文学研究資料館大会議室

(講演)

- 1, 「三島由紀夫と松本清張の描いたタイー1960年代の日タイ関係から見る日本文学ー」 チュラーロンコーン大学文学部修士課程日本語・日本文学専攻修士課程客員教授講演会, 2011年8月17日, チュラーロンコーン大学文学部日本語講座主催、チュラーロンコーン大学文学部・ボロム・ラーチャ・クマリービル
- 2, 「ゼロの焦点」 清張サロン 特別講演会, 2011年12月9日, 北九州市立松本清張記念館 (ワークショップ)
- 1, 「文学からみる日本とタイ」 久保田裕子 (福岡教育大学教授), ナムティップ・メータセート (チュラーロンコーン大学講師), 平松秀樹 (大阪大学非常勤講師)
チェンマイ大学日本研究セミナー・国際交流基金・平成23年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「日本文学に描かれたタイ国文化表象の分析研究」 共催, 2011年8月19日, チェンマイ大学人文学部
- 2, 「日本文学を海外で学ぶこと、教えること」 久保田裕子、ナムティップ・メータセート (チュラーロンコーン大学講師)、海野圭介 (国文学研究資料館・総合研究大学院大学准教授)
福岡教育大学国語教育講座・国際共生教育講座共催, 2012年1月16日, 福岡教育大学視聴覚ホール
(社会貢献)
- 1, 「もうひとつの〈日本〉 part 2ータイで受容される日本の小説、映画、サブカルチャー」
久保田裕子、ナムティップ・メータセート (チュラーロンコーン大学講師)
福岡市文学館・平成23年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「日本文学に描かれたタイ国文化表象の分析研究」 共催・市民公開講座, 2012年1月13日, 福岡市文学館赤煉瓦館